

新編



第八號

▲目次▼

袖 几 帳(短詩)..... 藏田の女子	夏 五 句(俳句)..... 西村能火
藻 鹽 草(美文)..... 千代延松澗	し ば 笛(短詩)..... 松江支部
銀 波(短詩)..... 大東支部	紅 箋(俳句)..... 大東支部
異 響(俳句)..... 内田格竹 立石洲洋	さ さ 枕(短詩)..... 水 壘等
夕 ち どり(短詩)..... 福田紫雲	あ さ が は(長詩)..... 飯塚雲水
金 雲(短詩)..... 濱田支部	秋 の 日(俳句)..... 千 江選
入 社 の 辞(雜文)..... 千代延松澗	波 (短詩)..... 多田東岳 河野翠嶺 千代延松澗 大屋桂水
そ の 日(紀行)..... 中村荷影	



第八號

明治三十八年十一月一日發行

袖几帳

藏田のふ子

南窓や舞樂遠音に詩を作る風よき頃ぞ君も招せむ

西風や月をよぎりて苦船の夢見る人に子語るひとに

うたはみな御光なれば憧れて天へとやゝによりぬ走りぬ

思ひわびぬ野分する日を北國の君に沈たく人なき日ぞと

今朝ひらく蓮の音さくと君さそひ花壇回りぬ鶴する中を

藻塩草 千代延松灣

月夜鴉と留めては見た一が
嘘のつけない鐘の敷う

のんびりとした浮きたつ様な、欸乃が夕暮の
寂寞を破つて銀鈴をも振るかの様

太陽は今や唐鐘岬の方に没し、夜の御神は静
に闇の几張を垂れんとして、海乗山一帯の松
は一刷毛ばかり薄墨の繪である、夕づゝの
かげ燈めく高島のあたり、紅色の雲、オレン
ジ色の雲と合しては離れ、離れては合して、
フワリ〜と西の方へ流れ去つた。

蟹が家には灯火の一つ二つ見えて、藻の花の
香夕の天地に満ち漂ひて、詩想轉た禁せず
、自然美の崇高偉大を感じしむる折から

わしが心と舟乗業は——
人の知らない苦勞する——

沈痛な、一種いふ可からざる悲哀を帯びた聲
が、濕つばい空氣に誘はれて冷やりとしたの
で、自分は愕然として身震ひした。
あゝ彼も人の子運命の神のしもとに鞭打たれ

て、たゞ見れば何の苦もなき水鳥の其の如く
に見ても、胸の中には絶えず苦勞を包んで
居るのであらう、と思ふと、いたましさの情
が發して、可憐なる彼れ舟人に至大の同情が
表したくなる、杯と黙想に耽つて果ては自分
の過去將來に迄及ぼして空想に時を移した。

此向ちやア今晚てぬした漁が有りますだア
割鍋を叩く様な銅羅聲にフト我れにかへつて
見れば、五十格好の赤ら顔の男と、脊の高い
瘡ぎすな、手拭を首に巻き付けて、ユウ斜に
先を垂したのと話ながら通り去つた。

いつか月は殿様山の一本松を僅かに離れて居
るのであつた。歌のこゑは聞けない、と見る
と、遙か宇島の先きをギイ〜と漕ぎ行く一
葉舟。(つばり)

▲寄贈新刊

- 國 詩(卷一號六)東京國詩社
- 五 月(二ノ三)名古屋五月會
- 月 華(二ノ七)長野縣少年同志會
- 新文藝(二ノ十)岐阜新文藝社

銀 波

(新涼會 大東支那)

梅 原 梅 窓

ねほらかにあれよと歌のみをしへを
侍せし夕戸の師にかしこみぬ

加 藤 青 波

わかつきや鞍馬を過ぎて大原女花の
ひと鬘もまた夢に似る

鈴 木 曉 星

ぬかづけばこゝにも崇きおん啓示夢
かへりゆけ稚兒の昔へ

原 田 青 鈴

朝風やよべ來し君をそとゆりて蓮の
み池にみ手しひまつる

伊 藤 曲 水

白がねの波おもしろう夜はふけて淡
路が島に霧にかくれぬ

赤 木 諷 軒

神杉のさても静けさおんやしる落葉
ふみて鶴一羽ぬし

佐々木春濤
濱やかに姉とまきける緒鼓の千鳥が
鳴くをみだれと云ひぬ

古 瀬 露 香

めでまさば朝八彩の露の香と生ひむ
とこしへみうたゝびませ

山 本 明 星

たへがたくまた誦しまつるおほみ歌
夢やうにもわれをまきぬる

相倚るに「たらぬ身」とのみ聲小さ
うねん手はたびぬ必らずよ君 (某に)

異 響

蠅多きチャン町に残る暑さ哉 枯 竹

従軍二年今年の梨も實り晁

洲 洋

朝寒の櫛落しけり臺どころ

秋立つや潮の花の白う散る

盗人の跡追ふ聲や今朝の秋
よく化ける狸噂や秋のくれ

夕 ち ざ り

福 田 紫 雲

うす靄をへだてて君とほの見ゆる河
原につみぬ花撫子を

鳴る海のあなたに人はねはすべしね
はさすとてもなつかしきかな

磯千鳥五丁へだててまたきいぬ闇な
る舟の櫓もさく夕

有明の月は家に入りねん方の玉の頬
を射る海の樓かな

夕汐はひたよせ磯の岩かげに花藻た
だよひ遠鳴く千鳥

蘆の葉は水にひたりてをどめ子の棹
に汐わくよき夕かも

金 雲

(新涼會 濱田支那)

増 野 翅 白

兒がかへの地藏よこぎる青蘆や翡翠
啼きよる嫁鳥のくれ

旅伏山天馬を御しておん神のつとひ
ます夜か茜華やぐ

城見ゆるみどり葉かげやうみのくれ
いにしへの香もしたひてゆけな

夕波や靄によき譜もころばせて夢の
せゆかん湖の透宮(以上、碧雲湖邊の)

讚するどみ兄したひて秋の戸に菊の
冠 捧げまゐらむ

松 本 泣 花

れもひては寝られぬ秋のながき夜を
籠のこほろぎうまし歌誦せ

うるはしき君が想をのせ來しや銀杏
に榮ゆる金色の雲

後 藤 孤 星

おん聲は山の戸もれし駒鳥のしらべ

と聞きぬはがらかにして

神藤ややはらの草に臥す鹿と春日の
巫女にむつみしや君(翅白兄)
(の旅に)

その日 荷 影

雨ならば、我涙よどの願は通りぬ、定めし日
は、涙なる雨に流されたり。かくていく日か
をくらしつ、こたびは雨にても、我晴れしむ
ねのごと、くもりなくてよどかけたる願のさ
てもあやぶまるるかなと、まへの日より、て
るく坊主(ぼん)つくり置きつ、庭なる南天(なんてん)にゆ
ひつとさつ、我ながらかかしかりき。
まどろむまも空のみきづかはれつ、星さらさ
ら朝風すしと心地よかりしは、ゆめなりし
か。心をしづめてさけば、雨の音高し。つと
めて仕度(したく)ど、のへ、雨の旅も亦一興と、玉造
さしていでたつ。朝ぎよめ正しき町の數々通
りぬけて、松の並木のひまに湖の面はの見ゆ
る乃木濱にいでし頃、雨はいよふりまさり
つ、なつかしき湖畔の眺の雨はまた一入よと
、常にはかこちがはなる雨を、今日ばかりは
、よきよきにと取りて、意氣益々壯なり。
さすがに雨もねぢたりけむ、北山のあたり、

入社の辭

千代延松灣

余よや不敏ふびん、加ふるに淺學せんがく非才ひさい、然
も入て「銀鈴」編輯へんしゆの一員いんたらん
とす、思はざるの甚だしきもの。
されど石見文壇いひかふんたんでんを其しかく寂寞
蕭條せうじやうたる、豈敢て不敏ふびんを顧あへり
のいとまあらんや。我に一貫くわんの主
義ぎあり、我に一條じちやうの主張しちやうあり、い
で猛進まうしんせん、烏うを淺學せんがく非才ひさいをい
はむ。エメルソン曰いはすや「主要しゆやう
なるものは熱ねつなり、熱は至誠しじせいより來
る」と、此至誠このしじせいと此主義このしゆぎとによつ
て、赤裸せきやく々に筆ふでを呵あせん哉や。聊いささか
以て入社にじやの辭じに代かふ。

一むら雲の落ちしよと見るまに、うれしや、
こなたには日の光みぬをめぐぬ。清き朝風湖上
を吹いて、さて稻葉いなばをわたりてさやくと、
そのはてをたのしき我一行の衣の袖に……
かゝ心地よやといさみし身には、足さへかる
くすすみすみて、ながき一すじ道もいつし
かつきんとせし頃は、道草手折たせらんと思はず
足を早めし君、寫生の筆に力を入れてとどま
りし人たち、思ひくになりて、さだめの宿
にあつまりしは、ひるに近かりき。まへなる
川に水の音高う、ゆの宿の静けさを破るのみ
。もあみをへてのそゝろありきに、温泉山い
わね寺に詣べ、みあぐるばかりの太木に、凌
宵花のこちたきまでさかりなるにひきかへ、
心ばかりのつちかひすらし見どころもなき花
壇だんに、さまでたかくもあらぬ桔梗ききやうの、やさし
うささいでたる、筆もがな、うつさまはしう
どこそねばぬしか。山門のまひるしづかに、
雞の何やらこつくとあるななど、いどのぞ
かなり。み堂みどうに拜し終りて、宿にかへり、以

るげの箸をどる。たのしき中に終りて、又々
うちつれたちて出づ、川をよぎりて小さき流
水をさかのばれば、水ますく清う、底なる
小石のかすも見ぬつ。ふさ子の君繁子の君た
ち、もすそからげて蜆しんどり給ふ、蛤かきならばと
へ、蜆しんの方は幼き弟君達を加へて、そこにも
ここにもの聲にぎはしう、籠かごもちて、かなた
こなたに馳はせたまひし清子の君も我も共に、
いつしかひきいれられつ。一時あまりをこゝ
に費して、かへればゆの煙白う、ゆつばはさ
よめられて、われらをまてり、皆つれだちて
いる。
風ひとしきり、涼しき蜩せみの聲を送りて清き
室にまどぬをひらき、つみなき遊びに五時す
ぐる頃までくらしして、いざとばかりいでたつ
。女郎花、かや、水引草など、思ひく手に手
折りて、いまだ道のなかばならざるに、日は
落ちぬ。夕映ゆふかげの空あかう、あすも亦はれなる
らし。

夜の暮かなたよりねそひて、森をうづめ山を
かくし、かくて、近き人の顔さへわかすなり
つ。遠きあなた、波しづかなる湖上に、いさ
り火の敷しげく、近き村々の家々には、風に
またたくともし火點々たり。今日の清遊に、
日頃のうさはらせしわれらは、月なきやみぢ
もものかはと、くさむらに虫しげきをあとに
家路いそぎつ。かへればまづ、庭なるてるて
る坊主まなこに入りぬ、今日のひよりをほこ
り顔に折柄ふきし風にわななきたり。

夏五句

能 火

夕立や雷すぎて一としきり
青簾巻くや青田の青嵐
猫の子に蚤取り遣れば眠り哉
兒を寝せて小さき蚊帳をかざせけり
行水の盥に散るや柿の花

し ば 笛

(新涼會 松江支部)

坂 本 笑 風
さやか夜月のみどのをそとぬけて
銀河わたらすみ神を見たり
中 津 峰 秋

野の夕村の童のしばふに岡をめぐ
りてれん扉によりぬ
月姫の銀簪碎けてさと散りて野の白
露の玉と飾りぬ
福 間 如 舟

新らしう詩に生るべきみさとしも不
才なればと三たびいなみぬ
濃き霧や世はとは落ちよ身まきては
たゆたひあるな詩人と生ひぬ
立 石 洲 洋

君往くと夢は破れぬ秋にしてわすれ
ますなの初嵐かな
生華のかをり戀しむ瞑想や几帳に秋
のおとづれにけり

紅 箋

(新涼會 大東支部)

子の指の穴ふさがばや初霰
萩の露香焚く尼が机かな
萩散るや廢寺の庭に雨細し
籠の虫死んで小萩に晝の雨
秋晴やをち方の山近く見ゆ
秋晴や松原通る菅の笠
草花や爰は長者の屋敷跡
朝霧や谷深う鳴く牛の聲
萩の宿俳句たしなむ女かな
色々の草に露おく百花園
舶來の艸花ゆかし露の玉
朝寒さ野守が軒の烟かな
旅にして柿多く村通りけり
萩の原家二三軒灯の細き
雨の萩物詫び多き夕かな

▲寄贈新刊

□白 虹 (二ノ三) 岡山血汐會
□曳馬之友 (二十八) 靜岡縣 實業共勵會

な な 枕

伊 藤 曲 水

君が琴とわがふく笛と虫の夜や萩の
小窓に月さしにけり
立 石 洲 洋

どつ國の戀物語なつかしみ學士の君
を巻く十たりかな
山 下 石 泉

秋一夜たびし「いたみ」としはらし
く胸はいだきて雨さきにけり
高 瀬 淡 巖

水引の紅美しく、朝明を露めでて
行く人にこぼれぬ
肩に散る落葉に耳をかたふけぬ天よ
りひやく音もするやと
秋九月愛宕祭りに鈴つけて提灯さげ
て人とならびぬ

立 田 紅 翠
櫻がり蒲團ゆたかの山駕籠に更衣お

はしぬ水に浴ふ道
永劫に二なき眸と黒髪とはだへは君
にゆるされしもの

天地に照る日雨の日風の日のあるご
と胸のやすからぬかな
若うして詩歌ひいづるかん才の君に
添ふべく低き名やわれ(水壁の君)

福間 如舟

ひと花の君へと黄菊香を持たばよし
とねばさばみ歌たまはむ

なほもよる戀ふ身うつゝと君まけば
芙蓉ひらきて星かゝやきぬ

秋の庵寂寞として夜を深みよりく
黄なる花の香もしぬ

ぬかづけばいしくも草の香のゆらぎ
野の秋にして人を酔はしむ

米村 水聲

さは君がみ名を胸なる彩壁に秘め得
てよりぞまどひそめさや

こほろぎや秋ぐさめぐる家の中にわ

れ住みなれぬ二人の親と
空候に姫がぎんぞの裾のさとふれて
鳴れるものにか草の鈴虫
十八の秋行く日なり白花に雨する日
なり戸に歌かきぬ
いつの日か野にあひやがてはぐれた
る君によく似し人とあひけり

あさがは

飯塚 雲水

軒につるした筒の朝顔

のびたる蔓に大きく咲きて

微風にそよぐを今落ちるよと

みやりし少女さゝやき立てり

涼しき風の窓ふくけさを

ちさく晚れてさいた机の

朝がは白しやはらぎの色

混濁の世の汚穢を出でて

秋の日 千江選

曉立ちて雲あざやかに
朝顔さける園生のあさを
あげはの蝶となりても見たし
塵のこの身をしばし忘れて
結棒とられた朝顔の匂も
人より人に千代につたはり
世々にめづるを落寞のわれ
せめても汝が露に宿らむ

▲奇贈新刊

- 琵琶文壇 (二ノ三) 滋賀縣琵琶會
- 少女新聞 (三ノ八) 東京淺草少女會
- 艸 笛 (三ノ八) 松江報光社
- 青 春 (四) 東京青春社
- 學之友 (一〇) 岡山學之友雜誌社
- 若 艸 (第三) 出雲新涼會支部
- 友 友 (第三) 加賀青年文友會
- すゝか (第六卷) 三重縣鈴峰會

燈しびを中に栗焼く山家哉
晒布す四條河原の蜻蛉かな
更けわたる關八州や星月夜
人寂し坂路を招く芒かな
放屁虫半堀る爺の足を追ふ
鳴子引き且つ手を鳴らす翁哉
今年酒酔ふて端居に轉び覺
菊白し夜明の園に老一人
庭前の夕顔白し星月夜
先生の改良したる鳴子かな
夕榮や蘆の枯葉の赤猪鈴
葉裏照る森の陽の蜻蛉かな
今年酒鐵漿壺にさし入れぬ
葉を渡る蟪蛄の斧や肩の上

波舍 死骨 自來 波男 翠子 青山 靜月 九菊 崑泉 木靈 花楓 萬山 硯州 翡翠耶



多田東岳

彩雲に希望をのせて山ひとつかなた
 飛びゆく鳥の數よむ
 わびしさは秋の夕べの竹の宿君をよ
 せきて語る室なき

以下亡き友を想ひて
 北東隔て二丁の父と友讀經よろしき
 中央の我が宿

(父の墓は東の丘、友の墓は北の里、其間
 僅りに二町をへたて、中央に我家あり)

河野翠漱

君思ふ思はず没我、み手による利那
 怨みもなげきもありや
 とこ春や百夜四たりの樂人の女たち

なるまどゐに侍る
 晴る日と降る日と水の舟がかり三
 日御坊に、夜も寝ねたれば

千代延松灣

島の寺鐘の響きの末消えて船はあし
 女の鬮にくれゆく
 萩散りぬ蟲の音たぬ高殿の琴の音
 やみて月細りゆく
 藻の花のかをりたつよふ磯の朝沖の
 白帆は鬮のなかなり

大屋桂水

黄金の波のたゆたひ日は入りぬまか
 せて往なむ終焉もかくや
 招かれて水晶殿のあかつきを人とか
 たりぬあをうみさして
 牛を追ふこの里夏はふかみどり、人
 みな若うれん神に似る

河野翠漱著 短歌零話 一册拾五錢
 杉浦朝武畫

發行所 島根縣邑智郡田所村 銀鈴社

毎月一回二十五日發行

廉價	比價	比價	比價
關西唯一	草	草	草
俳句雜誌	草	草	草
田舎の炭團俳句は黒し	草	草	草
定價六錢郵税五厘	草	草	草
速續讀者は會員と	草	草	草
し郵税を要せず	草	草	草
每	草	草	草
號	草	草	草
十七	草	草	草
頁	草	草	草

十一月三卷十一號發行

本誌は俳壇に貢献せん爲め起りたるものにして營利の爲め起りたるに非ず。本誌は發行三年を繼續し其數今や初刊の四冊に達し益々隆興發達す。每號二十餘箇の俳句會團の壇場を始めとし數箇の試問、課題は異彩を放ち俳諧に關する論說、記事數十篇あり、表紙裏畫は曙堂氏彩管を揮ひ全篇趣味横溢す。是實に「關西俳壇の重鎮たり」どの定評の存する所以也。而して「始めて草笛を見、其多趣味、其完整は想像の外なりし」云々の贊辭を得たる亦一再にして止まらず。俳壇の爲めとはいひ乍らまた吾人崇高なる一恩樂たり。希くは同好の士來り此清娛を俱にせよ

松江市殿町報光社内

草笛發行所

文藝學雜誌 若草

- 本誌は新涼會翼贊の下に發行せる文學雜誌也
- 寄稿家は翠漱、咀華、桂水、秋雨、天颯、八重櫻の諸氏其他にして欸裁また見るべし
- 本誌は年四回發行にして四冊郵税共貳拾八錢を要す但前金たるべし
- 次號來春一月十日發行文學を愛するものは來り贊せよ
- 發行所 出雲國大原郡大東町 新涼會支部

編輯擔任 清水橋村

刷新號 九月一日發行

卷壹號六要目

新興國文藝
界唯一なる
月刊詩歌雜誌

● 閨を例へば 岩野泡鳴
● 炎の夢 清水橋村

● 果敢なき新沙彌の戀を歌へる三百余行の長篇なり 前田夕暮

● 丘上吟 高信映水
● 若き女 荳月一露

● 桃のはね 細越夏村
● 人へやる扇に 山木露滴

● わつらひ 筒井莖坡
● さそめぎぬ 三木露風

● 野の虹 神尾江村
● 夢のゆくへ 正富汪洋

● 夕しほ 其他白眠、よし春、伏峰
● 泡沫、花眠、紫山、萍

● 花等の作あり

懸賞募集

長詩、短歌、俳句、小品文、批評文、小説、繪葉書圖案

右いづれも薄謝を呈す

發行所

東京府豊多摩郡下澁谷

國

詩

社

李蹊 華園兼秀編輯 毎月一回十日發行

少女新聞

▲壹部貳錢▲年廿四錢▲郵税不要
▲郵券代用は必五厘切手

▲本誌の内容 (各欄投書隨意)

▲本領 へて兒童の心得を説き ▲講話 には修養すべき爲め ▲學術 には理科地理歴史

▲文苑 には毎號懸賞で募集す
▲其他 料理

▲餘興 には面白き一口
▲其他 料理

▲文苑 には毎號懸賞で募集す
▲其他 料理

▲文苑 には毎號懸賞で募集す
▲其他 料理

▲文苑 には毎號懸賞で募集す
▲其他 料理

▲文苑 には毎號懸賞で募集す
▲其他 料理

▲文苑 には毎號懸賞で募集す
▲其他 料理

▲文苑 には毎號懸賞で募集す
▲其他 料理

▲文苑 には毎號懸賞で募集す
▲其他 料理

少女の必讀

題も文體も種類も用紙も隨意ですが、たゞ字数は百五十字位、時候に關したものは其季節のもの。必ず住所姓名をた書きなさい。切は毎月廿日限り

發行所 東京淺草區 松清町二七 少女會本部

島根縣邑智郡田所村大字下田所七百廿二番地 編輯兼發行人 河野岩雄

島根縣飯石郡赤名大字赤名八百三番地 印刷 木村柳三郎

同縣同郡同村大字同二百八十一番地 印刷 赤名活版所

島根縣邑智郡田所村 發行所 銀鈴社

明治三十八年十月廿五日印刷
年十一月一日發行 (隔月發行壹部五錢)

「銀鈴」大刷新豫告

年の改まると共に、本誌も亦新装を凝さいるべからず。是、文界の嚮導者、新趣味の開拓者を以て自ら任ずるもの、當に執るべき態度なるべければ也。故に諸子は左の事項によりて、金玉の稿を寄せ、我社の微志を空うせしめざらんことを望む。

表紙

杉浦朝武氏の彩管に成る、燦然目を奪ふものあるべし。

挿紙

菊版洋綴を施し、挿畫を新刻して、一見頗ぶる贅澤なるべし。

投稿募集の方法左の如し。

一 短編小説

半紙二十四字詰半面
十行十枚以下

二 美文

同上五枚以下

三 新體詩

四十行以内

四 短歌

二十首以内

五 俳句

十句以内

六 評論文

半紙二十四字詰半面
十行五枚以下

七 短歌小評

本誌本號に現はれたるものより批評せらるべし。二十四字詰二十行以内

右原稿締切は何れも十一月三十日限り。年末にて活版所多忙に付特に之を切上げたるを以て、締切後着のものは斷然次號に廻すべし。如斯改善を加ふるが故に、止を得ず本誌定價及び廣告料を改めたり。

定價

一冊 拾錢 六冊 五拾五錢(郵税不要)

廣告料

一行 貳拾錢 半頁 貳圓

明治三十八年十一月二日

銀鈴社

「銀鈴」の刷新に就て。

本誌は別項豫告せる如く次號新春號より大改善を施して江湖に見ゆべく候へば諸子は一層の贊助を與へられ度、誌代の如きも十二月初旬までに前金御送納吳々も願ひ上候從來の新涼會咏草は爾今新聞紙に掲載せるものうちより佳なりと認むるものを本誌に載せ別に會費を申請げず本誌六冊分以上前納者を以て會員と定め候。而して本誌の短歌は桂水、俳句は松灣主として之に當るべく、翠澗は松灣、桂水、朝風等と共に総べての方面に力を致すべく候。由來創作と研究とは本誌の主張にして先輩數氏も亦専ら我等を輔けらるべくたいく諸子が倍前の奮勵を希望して止まず候。

十一月一日

銀鈴社同人